様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月 １４ 日現在

機関番号：１３５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２９１６

研究課題名（和文）交換留学生は異なる文化をどのようにとらえ学んでいるか

研究課題名（英文）Intercultural Learning and Adaptation of Academic Exchange Students

研究代表者
奥村　圭子（OKUMURA, Keiko）

山梨大学・大学院総合研究部・教授

研究者番号：１０３７７６０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、短期交換留学生の中でも受入れ学生に対象を絞り、ケース・スタディを通して、調査協力者それぞれの異文化の学び、異文化適応の過程、ストレスへの対応、アイデンティティの確認、人間関係の形成、自己成長、そして言語習得について縦断的に考察した。調査協力者のホスト文化への理解は、表層的な知覚や気づきに留まっている場合と、価値観、態度、行動を左右し変化させる認識に及んでいる場合では大きな学びの差があること、また同時にその「文化」も顕在的な表層的レベルから潜在的な深層レベルのものまでと多岐に亘っていること、そしてその変容が重層的で多面的に絡み合っていることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
研究成果から、異文化適応を円滑に行う交換留学生の特徴がいくつか把握できたことにより、有意義な交換生派遣と受け入れの促進につながる留学前ガイダンスと異文化トレーニングのプログラムの作成に活かし、発信する。また、日本留学期間中の縦断的な認識の変容の考察は、学生が日本へ交換留学を通して、新しい価値観に出合い自己成長を遂げたり、人生観や価値観を変える出来事に遭遇する過程を辿ることで、流動的なグローバル社会において日本の大学が提供し得る教育機会を再度考え、かつ彼らが日本の大学・地域社会にもたらし得るインパクトと発展への契機を示唆することができる。

研究成果の概要（英文）：This study attempts to investigate how one-year exchange programme participants perceived their experiences, intercultural learning, adaptation processes and key factors associated with the adaptation to a Japanese university.
In this longitudinal study, the PAC analysis with 12 participants is carried out just after arrival (PAC-1), during the study abroad period (PAC-2), just before their return (PAC-3) and where possible a few years after the study abroad (PAC-4). In addition to carrying out the case studies on their consciousness transformation, overview of items associated with the meaning of study abroad, number and valence over time, were examined. The study has revealed that one year experience provided them with an opportunity to learn the language, strategies to cope with stresses, their own identities, self-development, as well as influencing their values, views of life and perspectives about the future. The findings may be fully utilised for the future candidates.

研究分野：外国語教育

キーワード：異文化適応　異文化間コミュニケーション　認知構造　認識の変容　交換留学　受入れ　留学の意義

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

(1)　グローバル化が進む中、JASSO(2019) によると、2019 年 5 月 1 日現在の留学生数は 312,214 人(前年比 13,234 人(4.4%)増) であり、2020 年までの日本政府の達成目標である 30 万人を越え、着実に増えている。研究代表者の勤務大学でも、「グローバルな視点をもちながら、地域社会の活性化を担う人材」の育成のため、交流協定大学との双方向交換留学の促進を積極的に図っている。多様性を尊重した活気のあるキャンパスづくりのため、日本人学生･教職員と外国人留学生が相互に刺激し、交流を促進する学生交換は、非常に重要な意味を持っている。

(2)　交換留学生が留学を通してどのような意義を見出し、体験を得て、反応をし、何を学んだかを知り、留学終了から数年後を含む縦断的調査によって、留学に対する意識がどう変容しているかを捉えることを通して、留学が彼らの人生観や将来の展望にどのような影響を与え、日本との関連性をどう将来に活かそうとしているかを理解できよう。これらが交換留学生を受入れの意義を把握することに繋がり、今後の地域社会や日本の大学教育にとっても非常に意義深いことであろうと考える。

2. 研究の目的

(1)　研究代表者は、短期交換留学生として 10 カ月ないし 1 年間、協定大学との間で受入れされた調査協力者らとともに Personal Attitude Construct (個人別態度構造) 分析法 (以後 PAC 分析、または PAC と示す) (内藤 2002) に準じて、留学意義の解釈を加えながら、認知変容の分析･考察を縦断的に行う質的研究を進めている。PAC-1 留学開始時、PAC-2 留学半ば、PAC-3 留学終了直前の 3 段階の調査の分析によると、12 名の調査協力者には、ある程度の個人差はあるものの、その認知の変容に共通した特徴が見られた。その共通点とは、1) 抽象度の高いイメージから徐々に具体化･明確化したイメージを持つようになっている、2) 個人が得た認識レベルであったものが、その認識を他の人や社会と共有したいという社会的な視点が加わっている、3) 自文化と相手文化、または自分と相手文化の人々を観察し異なるものとしての認識から、異なっていることが当然のことで、多様なものなのだという認識が生まれたり、共通点にも着目したりするように変化している、4) 自己への振り返りや人との関わりから、将来へのイメージが形成されるに至っている、5) 言語習得は重要な目的としての認識から、コミュニケーションの障壁もしくはツールとしての認識へと変化している、であった。

(2)　しかしながら、これら一群に共通する異文化適応の傾向を探るだけではなく、個々人に焦点を当てたホリスティックな観点 (内藤 2002: 11) に立ち、考察することも喫緊の課題であると考える。この 12 名に対して、新たに留学終了後 2～4 年経過した段階で、交換留学を振り返る PAC-4 を実施した。本報告では、PAC 分析から出されたデータから解釈できる全体像を概観したのち、ケース･スタディの中から葛藤状態が最も強かったと見られる1名の交換留学生 X を取り上げ、X がストレスを抱えていた留学開始時から留学半ばの適応プロセスを辿り、ストレス･コーピングに焦点を当てたケース･スタディの分析の一部を載せることとする。

3. 研究の方法

(1)　手法として、データの収集は内藤 (2002) が開発した PAC 分析に準じている。PAC 分析法は「テーマに関する自由連想、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、被検者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、実験者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度やイメージの構造を分析する方法」(内藤 2002:1) で、3 つの特徴を持つ。1) PAC 分析は、調査協力者主体の調査であること。通常のアンケートやインタビューで調査実施者が質問項目を事前に決めておいて行うものと異なり、連想刺激文を基に調査協力者の自由連想による語、フレーズ、文を連想項目として出してもらうため、実施者側からの制限がない、2) 連想間の類似間評定を行うこと。調査協力者が出した語、フレーズ、文のイメージ間の類似度を数値化し、この情報からデンドログラム (樹形図) を作成する、3) 調査協力者がクラスター構造のイメージや解釈の報告をインタビューの中で行うこと、の三点である。

(2)　調査協力者は、関東圏の大学に交換留学生として 10 カ月ないし 1 年間、協定大学との間で受入れされた欧米出身の 12 名であるが、今回ケース･スタディで取り上げる調査協力者 X は、欧州圏の大学で現代日本と日本語を学んでおり、来日後は留学生向けの K 館に住んでいた。学部からの依頼で、他 3 名の交換留学生と共に、学生と教職員のための英会話のクラスの講師を担当していた。到着時の日本語プレイスメント･テストでは、初級前半レベルと診断され、集中コースの一つ、Intensive I で基礎を固めるよう勧められたが、本人の強い希望で初級修了レベルの Intensive II を受講することとなった。開始後 2 週目に本人から Intensive II では内容が自分には少々難しいようだと申し出があり、話し合いの結果、その週半ばより、かな表記と名詞文を学び終えたばかりの Intensive I に移ることとなったが、それは、本人の本意ではなかった。ちょうどそのクラスに移って間もない段階で PAC-1 を、1 学期目が終了し学部生用の共通科目などを履修し始めた 2 学期目が始まった頃に PAC-2 を、帰国直前に PAC-3 を、留学終了から 3 年 3 か月を経た段階で PAC-4 を行った。

(3)　手続きとして調査協力者に対し、趣旨説明を行い、調査協力者はいつでも調査を中止できること、回答を拒否することができる点を確認し、録音の承諾を取り、プライバシーと個人の権益の保護が研究発表時に最優先される点を説明してから開始した。内藤 (2002) の手順に原則的に沿ったが、土田(2009)の「PAC-assist」を使用、距離は 7 段階評価、

You are going to start studying abroad. You will gain various experiences from now on. What image do you have of your studying abroad? What is the meaning of studying abroad to you? Think of as many words/phrases/sentences as you like.

図 1　PAC-1 連想刺激文

分析ソフトは HALWIN 6.24、距離関数はウォード法を用い、分析結果として出されたデンドログラムを基にクラスターの分け方について調査協力者と話し合いを持った。各連想項目が＋、－、±いずれのイメージかを聞き取り、各クラスターのイメージやクラスター間の関連性など、インタビューで語ってもらった。PAC-1 の提示刺激は、図 1 のとおりである。PAC-2 以降も留学の意義を問う連想刺激文を読み上げている。連想項目はそのまま英語で分析し、英語でのインタビューのデータは、本人に了承を得て必要に応じて和訳を行いた。その部分についてはバック･トランスレーション後、本人に確認を取った。

4. 研究成果

(1) 今回研究代表者が着目したのは、4 回の PAC 分析を通して想起された連想項目数、及びそれらの持つイメージについてである。連想刺激文を基に調査協力者の自由連想による語、フレーズ、文を連想項目として出してもらうため、項目数には制限がない。最多は 22 項目、最少は 5 であった。これら各項目に対して、調査協力者はイメージが positive (＋) か、negative (－) か、肯定的であるが否定的なイメージをも感じる (±) か、否定的なイメージであるが肯定的な意味合いも持つ(∓) かを評定するが、それらイメージの数が、PAC-1～4 の中でどのように推移しているか見ることは、個人の中の認知的な協和や、葛藤度や吐き出したいという思いの推移、ひいては、異文化適応の変容を知る一助となるのではないかと思われる。以下の図 2 に示すのが、調査協力者全体の項目数とその正負評定の内訳である。青が positive (+)、赤が negative (-)、 緑が neutral (± or ∓) で、各段階の PAC 分析の合計連想項目数を紫で示している。

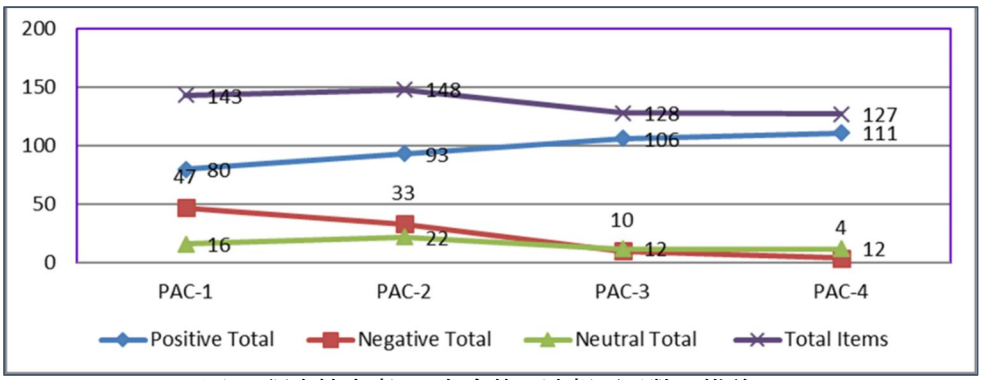

図2 調査協力者 12 名全体の連想項目数の推移

(2) 縦断的な連想項目数の推移は、1) 各 PAC 分析段階において連想項目数がどうか、どのようなイメージを抱いていたか、そして 2) 全体の項目数、及びそれぞれのイメージ数が PAC-1～4 の時間経過に伴って、どう変化したか、という二つの面から分析を行った。PAC-1 では、全体の項目数 143 のうち positive は 80 項目であるが、negative も 47 項目と少なくはない。一方 neutral は 16 項目で 3 つのイメージでは最も少ない。PAC-2 では、positive と neutral の増加に伴い、全体の項目数は PAC-1 から少し増えているが、negative は減っている。PAC-3 においては、positive は伸び続ける一方で、negative と neutral は半分以下に減少し、PAC-4 では PAC-3 の傾向がより鮮明に表出している。Positive 項目がその時点での心地よさや期待感、学びの喜びなどを表し、negative 項目が問題や不快なこと、悩みやストレスと関わっていることを表していると読み取れる一方、neutral について内藤 (2002) は、情緒が喚起して苦痛が生じるのを避ける「解離」または「自己疎隔感」と解釈しているが、複雑であるか肯定も否定もしかねているか、単にどちらとも言えないイメージであるとここでは解釈する。推移をみると、全体的な項目数は、PAC-1～2 で、140 以上と多く、認知構造の複雑さを表していると思われるが、PAC-3～4 で 128･127 と認知構造が落ち着き構造的にわかりやすく変化していると思われる。各イメージに目を向けると、positive は PAC-1 の留学開始の時点から PAC-3～4 に向けて徐々に増えているのに対し、項目数が PAC-1 で 47 もあった negative は PAC-1 実施時が最も高く徐々に減り、留学から数年が経過した段階の PAC-4 では、4 項目のみとなっている。Neutral は、PAC-1～2 へ移る時に多少増加したが、PAC-3 でまた減少し、PAC-4 でもそのレベルを維持している。つまり、調査協力者は留学開始直後の段階で、期待感を抱きながらも、違和感、戸惑い、適応しなければならない問題にぶつかり、複雑な認知構造を呈しているが、時間経過とともに、ストレスや問題と向き合いつつ、解決法を探りながら、文化を学び、調整することで、喜びを感じ、留学終了直前には、気持ちを整理し留学の意義を見出し、集大成を迎えようとしている変化が窺われる。これは、Lysgaard (1955)の唱える U カーブ仮説には異論を唱えることになり、むしろ、Ward, Bochner & Furnham (2001･2005) の報告にある「留学生たちは到着間もないときの抑鬱感がもっとも高く、その後まもなく大幅に改善して、後は緩やかに向上していった」に合致する結果だと言えよう。

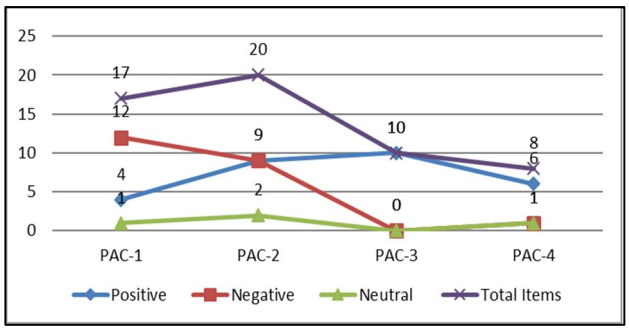

図3 調査協力者 X の連想項目数の推移

(3) 図3は、調査協力者 X の連想項目数の推

移である。まず、PAC-1 において、連想項目数が 17 と比較的多く、positive の項目が 4 であるのに対し negative なイメージが 12、そして中立的なイメージが 1 と、否定的なイメージが圧倒的に多い。否定的な項目が12 というのは、当該協力者の 4 つの段階の PAC の中でも、また全ての調査協力者 12 名の中でも最も多い数であることからも、X にとって留学開始まもなくが、厳しい時期であったことが窺える。PAC-2 においても、positive と negative の連想項目数が拮抗しているのも特徴的である。内藤(2002)は「プラスとマイナスのイメージが拮抗するほど、葛藤状態が強いことが示される」と述べている。しかし、PAC-3 になると、全ての negative と neutral 項目が消え、positive 項目のみとなり、留学から 3 年 3 か月後には negative と neutra1 が1項目ずつでそのほかは positive な 6 項目が連想されている。

（4） ここでは、紙幅の関係から、連想項目数にユニークな特徴が見られた調査研究者 X の PAC-1 と 2 の連想項目（図 4－1、4－2 を参照）のみを挙げ、本人の語りを基にした研究代表者の解釈を通して、調査協力者 X の連想項目数の推移苦境を乗り越えたかの考察を行いたい。

PAC-1	
Cluster A: Attitude toward language learning	
1） I came to improve Japanese language skills.	＋
2） I often feel I am making no progress.	－
11） Being in the lower class made me lose ambition.	－
13） I often forget grammar/vocabulary.	－
14） I have no way to check if what I am revising is correct.	－
4） It is nice when I understand Japanese language outside of the University.	＋
Cluster B: Organisation and Distraction	
15) There is a lot of paperwork to track this makes revision difficult.	－
10) I am easily distracted from studies.	－
17) The accommodation isn't very clean.	－
Cluster C: Confidence issue	
3) I struggle to think positively about my studies	－
5) I hate performing, but it is expected of you in Japan	－
12) I don't practise speaking or listening enough.	－
Cluster D: Expressing myself	
7) Making Japanese friends is hard.	－
16) Often I have nothing to say, so I say nothing, people think don't understand	∓
Cluster E: General life	
6) The cost of living is troublingly high.	－
8) I do like being in Japan, but I have no specific reason.	＋
9) Locals are very welcoming, more than in England.	＋

図4－1 X による PAC-1 の連想項目

PAC-2	
Cluster A: Academic performances	
1) Improve Japanese language skills	＋
2) I might fail my classes.	－
8) I feel I don't have time to learn.	－
10) Japanese grammar is hard.	±
4) I get low grades.	－
6) Remembering Kanji	＋
7) I'm bad at group work.	－
Cluster B: Time management/Socialising	
10) I have little personal time.	－
13) Tourism.	＋
11) Make friends with Japanese people.	＋
15) Days with only 1 class are annoying.	－
14) I think I've been everywhere in ××××.	±
Cluster C: Everyday Life	
8) Gain better understanding of Japanese culture	＋
9) Finances	＋
12) The Kaikan is cheap.	＋
16) The Kaikan is less dirty.	＋
20) The weather is somewhat uncomfortable.	－
17) Learning to cook new things.	＋
19) I can't cook Japanese food well	－
18) I miss my country's food.	－

図4－2 X による PAC-2 の連想項目

PAC-1 と 2 のクラスターごとの連想項目、そして左の番号、例えば、図 4-1 の Cluster A の 1 行目"I came to improve Japanese language skills."の左にある「1）」は、調査協力者が 1 番目に重要だと見なしたという重要度評価を表し、項目の右側には、イメージが positive (+), negative (-), または neutral (± or ∓)のいずれか、正負評定の結果が示されている。異文化間カウンセリング学が指摘するように、異文化適応過程は、カルチャーショック（Oberg 1960） という明瞭な形ではなくとも、ストレスの連続である（Berry & Kim 1988）。1980 年代より、カルチャーショックは、新しい文化を学ぶスキルや自分を成長させる自己理解の深化とそれに伴う変容を伴う学習経験だと考えられるようになってきた (Bochner 1982)。ストレスへの対処について Lazarus & Folkman (1984) は、認知行動理論に則り、人はストレッサーについて評価し、対応する環境と関わっていく中で、何が、どの程度のストレスなのかを判断していると言う。Lazarus はこうした決定を、「認知的評価」と呼び、人はその決定を行いながら、周りからの色々な要求や、湧き上がってくる感情を処理しつつ「対処（コーピング）」していると述べている。ストレッサーに対する一次評価では、「自分にとってどんな害をもたらすか」を認知し、二次評価では「ストレスを軽減することができるか」の判断を行うのである。また、ストレス・コーピングには、問題焦点型コーピング（問題解決の可能性がある場合）、情動焦点型コーピング（問題解決の可能性がない非常に低い場合）、そして社会的支援探索（要請）コーピングなどの対処法があるという。

（5） ① X の留学開始時のイメージについての総合的解釈（PAC-1）

日本語学習から感じるストレスが、特に A から D のクラスターに影響しているように思われる。授業がスタートしたものの、1）に挙げた留学の目的である「日本には日本語の能力を上げるために来た」にもかかわらず、用意されていた Intensive の2クラス共が本人のレベルに適したものではなく、モチベーションが上がらず、ストレスを感じている。配布された紙類の整理も多すぎてできない、どのように復習していいのかわからないと、勉学自体が前に進んでいないようであり、プレゼンテーションといったクラス活動にも準備が始まる前から不安を抱えている。しかし、クラス外で日本語の上達の方法を模索している様子も見られる。日本語学習で感じるストレスのほか、日本人の友達も容易にはできない、寮である K 館がいつも掃除を要する状態であるのもストレスであろうが、気分が晴れない時には、掃除を熱心にすることでストレス発散を図っているのは特筆すべき点である。その他、日本語の習得以外には、特段日本文化に関心はないようだが、日本は何となく好きで、地域でも居心地のよさを感じていることが窺える。

② X の留学半ばのイメージについての総合的解釈 （PAC-2）

この段階では、1 学期目の Intensive I は終了し、日本語科目のほか共通科目の履修することになるが、

ガイダンスに参加しておらず、自分で挑戦したい科目を履修登録しており、要求される日本語力・学力が比較的高い科目も含まれていた。この段階の X にとって、クラスターA が一番重要なクラスターで、勉学面が順調にいけば、クラスターB の項目もそれに従って、うまく運ぶであろうと本人も分析している。クラスターC に挙げられている項目には、いくつか PAC-1 の段階で問題**として挙げられていたことが解決**されていることが報告されていた。一方、他のさまざまな問題を挙げて述べることで、否定的な要素を客観的に見つめ、ストレッサーの評価や、どのような害をもたらすか、そのストレスは軽減可能かなどの評価を行っているのではないかと解釈できる。問題点を挙げて不満として口に出すことが、ストレス・コーピングの一助となっているのかもしれない。PAC-2 では、日本語学習や学業面での不安や問題が細かく連想項目に出されており、勉強が足りない、また自由になる時間があまりないことを問題視している。クラスターB では、時間の管理が困難であることと同時に、教室外での友人との時間の使い方の例として、町を歩き回ることが挙げられているが、歩きながら、地域の人々の何気ない生活の一コマを見て楽しむことが、X にとっては何よりのストレス解消であり、新たな日本文化体験となっている。

③留学の意義については、PAC-1では 1)「日本語力を上達させるために来た」と明言している。しかしながら、授業において、2)「前に進んでいる気がしない」11)「このクラスでは意欲を失ってしまう」13)「しばしば文法や語彙を忘れてしまう」14)「自分の復習の仕方が正しいのか確かめる術がない」となかなかの困難さを抱えながらも、留学の意義を 4)「学外で日本語が理解できた時に感じる」と述べている。部屋の整理がうまくできないと勉学環境を整えることもできず、絶望感を感じつつも、教室の外で、日本語が意外に読めたり、理解できたりすることが次への糧となっており、留学半ばの段階 PAC-2 でも1)「日本語力の向上」が留学の目標として初めに掲げられている。PAC-2 では、5)「学ぶ時間があまりない」2)「履修した科目でパスできないかもしれない」、4)「合格しても点数が低いだろう」3)「文法は難しい」6)「漢字が覚えられない」、7)「グループワークは悩みの種」といった語学学習に関わる問題点を挙げながらも、何とか取り組み、履修科目において合格したいという気持ちを持ち続けている。PAC-2 の語りでは、旅をすること、文化を学ぶことも来日の目的であったことに改めて気が付いたかのようで、自由になる時間やお金は限られているものの、X なりの方法で楽しんでいる様子が窺える。学業面で成功しているかと問えば、決してそうとは言えない。しかし、勉学面、環境面でのストレスへの対処も彼独自のコーピング戦略を用い、勉学面でのいらいらを解消するため掃除をすることで自分のみならず、K 館の寮生が住みやすい環境づくりに貢献している。否定的な項目を数多く挙げることで、ストレッサーの評価をし、問題解決が可能かどうかの見極めをしつつ、自分で情動的な切り替えを巧みに図っている。自己成長や文化学習の機会を狙いつつ、社会的支援は求めず、人との深い関係を築こうとはしていないのが特徴的であると言える。これらの成果を基に、交換留学生のスムーズな異文化適応に向けて潜在的なストレッサーに直面する前から予防的に行うようなガイダンスにホスト側として提供できれば望ましいであろうし、自国での留学準備段階で言語教育や教養科目についての情報を共有し、文化学習機会などを示し、事前準備を進めてもらうようにするべきであろう。

（6） 今後に向けて、まず、これまでデータ収集を行った 12 名のケース・スタディを通して、調査協力者それぞれの異文化の学びから、ストレスへの対応、アイデンティティの確認、人間関係の形成、地域社会とのつながり構築、そして自己成長、文化の学びや言語習得について考察しているが、調査協力者すべてに当てはまるようなテーマについて整理を行いたい。そしてその適応過程において、認識の変容が顕在的な表層的レベルから潜在的な深層レベルのものまで多岐にわたっているのを詳しく見るために、これまで調査を行なってきた異文化適応に関する定性的調査に加え、連想項目に定量的な属性の分析を行うことを考えている。これらの日本の大学への交換留学によって起こった認識変容の全体的な考察は、個人のみならず、日本の大学・地域社会・グローバル社会にもたらす影響を明らかにする、独創的な研究となるであろう。そして、成果や成果を応用してデザインしたプログラムについて、積極的に社会に発信してゆきたい。

＜引用文献＞

Berry, J. W., & Kim, U. (1988). Acculturation and mental health. In P. R. Dasen, J. W. Berry, & N. Sartorius (Eds.), *Cross-cultural research and methodology series, Vol. 10. Health and cross-cultural psychology: Toward applications*, 207-236. Sage.

Bochner, S. (1982). The social psychology of cross-cultural relations. In S. Bochner, (Ed.) *Cultures in Contact: Studies in cross-cultural interaction.* 5-44. Oxford: Pergamon.

JASSO (2020).『2019 年度外国人留学生在籍状況調査結果』 https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2019.html（2020 年 6 月 30 日アクセス）

Lazarus, R S & Folkman, S. (1984). *Stress, Appraisal, and Coping.* New York: Springer.

Lysgaard, S. (1955). Adjustment in foreign society: Norwegian Fulbright grantees visiting the United States. *International Social Science Bulletin,* 7, 45- 51.

内藤哲雄(2002).『PAC 分析実施法入門［改訂版］―「個」を科学する新技法への招待』. ナカニシヤ出版.

Oberg, K. (1960). Culture shock: adjustment to new cultural environments. *Practical Anthropology,* 7, 177-l82.

土田義郎(2009).『PAC 分析支援ツーhttp://wwwr.kanazawait.ac.jp/~tsuchida/lecture/pac-assist.htm（2014 年 10 月アクセス）

Ward, C., Bochner, S. & Furnham, A. (2005). *The Psychology of Culture Shock.* London: Routledge.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 張 梓旋・奥村 圭子	４．巻 5
２．論文標題 「日本語母語場面と日中接触場面における女子大学生の『ほめ』に関する対照研究」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『山梨大学教育国際化推進機構紀要年報 高等教育と国際化』	６．最初と最後の頁 8-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 西部由佳・岩佐詩子・金庭久美子・坂井菜緒・萩原孝恵・奥村圭子	４．巻 -
２．論文標題 「日本語インタビューテストにおけるターン受取後の「考えている」表現の分析－学習者のレベル別差異とその特徴－」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 2019年度日本語教育学会支部集会【関西支部集会】予稿集	６．最初と最後の頁 39-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 奥村　圭子	４．巻 1
２．論文標題 留学の意義と異文化適応の縦断的分析ー在日交換留学生のケース・スタディから	５．発行年 2017年
３．雑誌名 PAC分析研究	６．最初と最後の頁 61-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 王　一迪・奥村　圭子	４．巻 4
２．論文標題 大学生初対面会話における話題の選択スキーマとストラテジー	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『高等教育と国際化』山梨大学教育国際化推進機構紀要年報	６．最初と最後の頁 29-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Philip Graham and Keiko Okumura	4．巻 4
2．論文標題 A Comparison of British and Japanese English Language Teaching Styles: The Learners' perspective	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『高等教育と国際化』山梨大学教育国際化推進機構紀要年報	6．最初と最後の頁 3-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Philip Zamrej Graham & Keiko Okumura	4．巻 No.3
2．論文標題 The Homestay Experience for Short Study Abroad Programme Students: Bridging the Cultural and Linguistic Devide	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『高等教育と国際化』山梨大学教育国際化推進機構紀要年報	6．最初と最後の頁 3－10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Philip Zamrej Graham and Keiko Okumura	4．巻 2
2．論文標題 How best to prepare students for short-term study abroad programmes, based on their expectations and experiences	5．発行年 2016年
3．雑誌名 『高等教育と国際化』山梨大学教育国際化推進機構紀要年報	6．最初と最後の頁 3-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 奥村　圭子	4．巻 2
2．論文標題 交換留学の意義の変容と異文化適応プロセス―在日留学生のケース分析から―	5．発行年 2016年
3．雑誌名 『高等教育と国際化』山梨大学教育国際化推進機構紀要年報	6．最初と最後の頁 19-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 西部由佳・岩佐詩子・金庭久美子・萩原孝恵・水上由美・奥村圭子	４．巻 4
２．論文標題 ＯＰＩにおける話題転換の方法―上級話者と中級話者に対するテスターの関わりに着目して―	５．発行年 2016年
３．雑誌名 日本語プロフィシェンシー研究	６．最初と最後の頁 132-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 奥村 圭子
２．発表標題 「日本留学に対する交換留学生の意識変容―PAC分析から見えてくるもの」
３．学会等名 第13回PAC分析学会大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 西部由佳・岩佐詩子・金庭久美子・坂井菜緒・萩原孝恵・奥村圭子
２．発表標題 「日本語インタビューテストにおけるターン受取後の「考えている」表現の分析－学習者のレベル別差異とその特徴－」
３．学会等名 2019年度日本語教育学会支部集会【関西支部集会】集会自体はコロナウイルス感染防止のために中止となったが予稿集を持って査読付き発表と見なすとのこと。
４．発表年 2020年

１．発表者名 西部由佳、岩佐詩子、萩原孝恵、金庭久美子、坂井菜緒、奥村圭子
２．発表標題 日中接触場面に見られる日本語学習者のほめ表現とその返答―日本語母語話者同士の母語場面との比較をもとに―
３．学会等名 2018年度第4回支部集会【関東支部】（交流ひろば）
４．発表年 2018年

１．発表者名 張　梓旋・　奥村　圭子
２．発表標題 日中接触場面に見られる日本語学習者のほめ表現とその返答―日本語母語話者同士の母語場面との比較をもとに―
３．学会等名 2018年度日本語教育学会第2支部集会【北海道支部】（交流ひろば）
４．発表年 2018年

１．発表者名 奥村　圭子
２．発表標題 在日留学生の異文化適応とストレス・コーピング―交換留学生のケース・スタディをもとに―
３．学会等名 2018年度日本語教育学会秋季大会（交流ひろば）
４．発表年 2018年

１．発表者名 奥村圭子
２．発表標題 ライフストーリー･インタビュー活動の日本語教育における可能性
３．学会等名 日本語教育学会2017 年度第7 回支部集会【関東支部】交流ひろば
４．発表年 2017年

１．発表者名 奥村圭子
２．発表標題 交換プログラムに参加する学生の異文化適応研究
３．学会等名 Venezia ICJLE 2018 日本語教育国際研究大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 〔監修〕山根 智恵〔編集委員〕佐藤 友子・奥村圭子	４．発行年 2020年
２．出版社 研究社	５．総ページ数 1224頁
３．書名 『研究社日本語口語表現辞典　第2版 』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

山梨大学教員情報
http://nerdb-re.yamanashi.ac.jp/Profiles/339/0033839/profile.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考